

トウルサイン の次元行

1

夏川 宙

トウルサインの次元行

トウルサインの次元行

第一章 旅立ち

1

『ズ————ッ!』

トウルサインが凄まじい大音量のくぐもった声を上げつつ、そして笑いながら、惑星ほどの大きさの巨体を、自らの体にぶつけた。

ドドドドドドドドドドドドドドドド

体当たりを食らったトウルサイン——トウルサイン2——の巨軀がゆれ、轟音が鳴りひびいた。

トウルサインの体は、光子が同時刻に空間内の2点に同時に存在するが如く、この闇の領域——宇宙に煌めく星々のような、虹色に輝く美麗な超巨大エナジーボールに照らされている、高位次元空間——内に、同時に3体存在するのである。

『ズ————ッ!』

トウルサインの次元行

トウルサイン2も、笑いながら声を発し、ぶつけたトウルサイン1に軽く巨体を接触させた——軽くと言っても、極めて大きな運動エネルギーを持っているが。

2体のトウルサインは、じゃれあっているのだ。

「そろそろ、時間だぞ！」

3体目のトウルサイン、トウルサイン3が、次元転射マイクロ波送信器——トウルサイン3体内に存在する器官であり、送信機ではなく送信「器」だ——で呼びかけた。

「ほんとだ」

「部分的に正しい物理理論を考える遊びにも飽きたし、行こうか」

「うん。それらの理論は美しさにおいて万物理論には到底かなわないから、いまいち面白くない」

「だよー。特殊点（特異点）が、理論の華麗さを大幅に下げてる」

「特殊点、すつきりしなさすぎ」

「その表現、かなり適切だよ。気に入った！」

「えへへへへへ」

衛星ほどもある巨大な脳——主脳。多数の副脳も持っている——を適度に使って、わざと不完全な物理理論を考える事が、第2上位知性体トウルサインの楽しみの一つなのである。

トウルサインの次元行

青いシロナガスクジラから鰭^{ひれ}を取り除き、目の数を7つにしたような姿のトウルサイン達は、次元転射マイクロ波を送受信して楽しくコミュニケーションを行いながら、大長老カチトスの元へ向かった。

ゴールドに輝く豪華な、恒星サイズの超巨大次元球の横にどつしりと構えた、大長老カチトス3体が、ほぼ同時に惑星サイズの口を厳かに開いた——身体は、恒星サイズ・紫色・トウルサインに似た姿である。

『ズ

ツ！』

『ズ

ツ！』

トウルサイン1・2・3も、高位次元空間内に音波を放った。

「お前は、これから成次元体儀式^{せいじげんたいぎしき}である成体次元行^{せいたいじげんこう}を行わねばならぬ」

トウルサイン達の次元転射マイクロ波受信器が、顔面中央の超巨大な蒼い目を緑色に煌めかせた、大長老1が送信した次元転射マイクロ波をとらえた。

「それは、どのような儀式ですか？」

と、畏まった口調で、トウルサイン2。

「挑戦体が数多の低位次元空間を抜けて創世次元球^{そうせいじげんきゆう}のもとへ行き、創世次元球から泡宇宙の粉末”を受け取って、この高位次元空間に持ちかえるという儀式だ”

トウルサインの次元行

「儀式には、どのような意義があるのでしようか？」

「意義を教えることは出来ぬ。——ガイドボールが、お前に道を示し続ける」

大長老1の左隣に、ブルーの光を放つ巨大なエネルギーファイア——トウルサインの目ぐらいの大きさ——が忽然と姿をあらわし、同じ色の複合位相偽性素粒子ふくごういそうぎせいそりゆうしを振りまきながら、トウルサインの右斜め前まで素早く移動した。

「初めまして。ガイドボール“ライメルン”です。よろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしく！」

「成体次元行達成には、少なくとも5000サイクル（約17億年）の時を要するであろう。そして帰還する上位知性体が3割にも満たぬ達成困難な儀式だ。心してかかれ」

「分かりました。——早速、出立致します！」

「うむ。健闘を祈る」

「——スイラ量子誘導を行って、次元知性体門を開きます」

ライメルンが、ブルーの超微細粒子を空間上の一点に収束照射してスイラ量子誘導を行い、真っ黒な虚空に、恒星サイズの白い次元知性体門——知性を持つエナジーゲート——を現出させた。

「私についてきて下さい」

「分かった」

トウルサインの次元行

次元知性体門へ向けて、ガイドボールが、高速で先導を開始する。

『ズ————ッ！』

トウルサイン達は一声上げると、体内の相転移次元性対消滅器官が生成した膨大なエネルギーを、巨軀後方のルーゲン噴射口から吹きだして、ライメルンへの追従を始めた。

底抜けに樂觀的なトウルサイン達は、帰還しなかった上位知性体達は、いずれかの低位次元空間を気に入ってそこに住み着いたために帰ってこなかったのだと考えており、トウルサイン達の頭の中は、未知の時空でこれから始まる胸躍る冒険の事でいっぱいだ。顔中央のライトグリーンの巨眼をそれぞれ赤・緑・青に閃かせた、トウルサイン1・2・3は、凸型フォーメーションを組んで、光速を超える速度で高位次元空間を驀進する。

光速を越えているが、この幻想的な美しさを持つ黒い領域においては、時の流れは逆転しない。

『ズ————ッ！』

トウルサイン3体は、とても嬉しそうな顔で、白く輝く超巨大な次元知性体門に突入していった……

トゥルサインの次元行

本作品はフィクションであり、
実在のいかなる個人・
集団とも一切関係ありません。

トゥルサインの次元行 1
<http://p.booklog.jp/book/66345>

著者：夏川 宙

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/zcfzv5dyrd/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/66345>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/66345>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ